

# 小笠原諸島と英語文学研究

—— 〈研究〉 についての覚え書き ——

齋 藤 一

## 1

日本国東京都の南端，太平洋上にある小笠原諸島は，英語と日本語の接触領域である。このような場に，私のような英語文学研究者がどのように接触しうるのかを考察しつつ，〈研究〉というものの境界をひき直す予備的作業をおこなうのが本論のねらいである。

すでに周知のことではあるが，小笠原諸島は英語と日本語が接触し交渉しあってきた場である。前世紀末から，精力的に多言語接触領域としての小笠原諸島に注目してきたダニエル・ロングの記述を引用しておく。

### ■ 第1期（1830～1860年）様々な言語の接触

1830（天保元）年 5人の欧米人と20人の太平洋諸島民が入植。インドヨーロッパ語族，西オーストロネシア語族，東オーストロネシア語族など様々な言語が接触。

### ■ 第2期（1861～1945年）日本人の入植による日本語との接触

1861（文久元）年 咸臨丸に乗った幕府一行が島を調査。

1862（文久2）年 幕府による入植政策が始まる。（翌年に引き上げ）

1876（明治8）年 明治政府により入植が再開。

1882（明治15）年 この時期までに外国人島民はすべて日本に帰化。

1945（昭和20）年 太平洋戦争が激化し，全島民6886人が内地へ強制疎開。

### ■ 第3期（1946～1968年）米軍施政下での英語による教育

1946（昭和21）年 欧米系島民129人が帰島。

1955（昭和30）年 米海軍ラドフォードスクールでの英語による教育。

### ■ 第4期（1968～現在）

1968（昭和43）年 小笠原返還協定調印。日本へ返還される。内地での生活を余儀なくされていた旧島民が帰島を開始する。

欧米系島民の成人を対象に夜間の日本語講座が開講される。1976（昭和51）年まで。

この間、欧米系島民の中には日本語の生活を不自由に感じ、島を去る島民も出てくる。

返還後～現在 南の楽園での生活を求め、新島民が移住してくる。<sup>1</sup>

このような歴史的経緯のため、小笠原では言語の混成化が顕著であった。その結果、日本語（八丈島方言）と英語による混成言語、「小笠原方言」が誕生している。

- ・[昔の写真の被写体を聞かれて]分からないよ、みんな back side of the kids だけど、それ、父島の Santa Claus だじゃ。（意識：分からないよ。みな子供たちの後ろ姿だけど、それ、父島のサンタクロースだよ。）
- ・[台風について]Me の sponsor のあのう、何と言うの？その French door, あのう glass door が割れて、water が up to the knee だった。（意識：私の里親のところの観音開きのガラスドアが割れて、水が膝まで入った。）<sup>2</sup>

このような「方言」に取り組むことは、例えば日本語とは何なのか、英語とは何なのかという根源的な問題に取り組むことであろう。それは言語学に大きな刺戟となるはずであろうし、だからこそロングのような研究者が注目してきたのであろう。

無論、こうした根源的な問題に突き当たっているのは言語学ばかりではない。文学、社会学、そして法学の面から、小笠原における複数言語・文化の接触領域としての特徴を探る試みがなされている。例えば、言語や文化、文学についてはダニエル・ロング編『小笠原学ことはじめ』をはじめとする「小笠原シリーズ」が有名である。<sup>3</sup> この『小笠原学ことはじめ』の「はじめに」において、ロングは「小笠原諸島にはもう一つの日本文化がある。そこには、現代日本のキーワードになっている「国際化社会」が2世紀も前から実現していたのである」、だからそれに学ぶため「小笠原諸島の他民族、多文化、多言語社会を、その歴史的背景と現状から考察する。この知られざる日本の一地域社会を歴史、言語、方言、地名、政治、社会、文学、音楽などの様々な角度から捉えてい」く必要があると説いている。<sup>4</sup> また、2007年、この「小笠原シリーズ」の参加者の一人である石原俊が、異なる法体系の接触について考察した大著『近代日本と小

笠原諸島——移動民の島々と帝国』を出版し、欧米日といった帝国との遭遇を生きてきた小笠原島民の、「重ねかかれてきた主権的な力を脱臼させる「アナキカルで反抗的」な生の〈断片〉」を取り上げて見せた。<sup>5</sup> いずれも、複数の言語・文化・法が混在する状況において、それぞれのあり方を問い直す作業である。<sup>6</sup> こうした作業の場として、小笠原諸島が歴史上何度目になるか分からないがクローズアップされてきている。そして私のような門外漢ですらも関心を寄せるようになってきている。

## 2

そもそも、英語文学を専門とする私が、なぜ小笠原諸島に惹かれたのかについて説明しておきたい。私は、拙著『帝国日本の英文学』において、日本における英文学研究という制度を、英（米）語と日本語との複雑な交渉の場の産物でありつつも、しかしそこから逸脱する契機を秘めた営為として考察したが、<sup>7</sup> これは上述のロングや石原が、小笠原における多言語や複数の法の交渉と（権）力の働きに関心を抱いたのと似ている。それではなぜ、彼ら／彼女らは接触領域としての小笠原諸島に惹かれるのか。それは、上述のとおり、彼ら／彼女らが多言語、多文化、複数の法が接触しせめぎ合う場のダイナミズムに巻き込まれていることを強く意識しているからであろう。どこに住もうとも、私たちがまたこうした接触や交渉の場に存在している。そうであれば、そのような接触や交渉を先鋭的に経験したきた場において、言語・文化・法についてのさまざまな常識を学び捨てる方法を学んだほうがよい。——このように考える私が、ロングや石原の著書によって小笠原諸島の波打ち際に漂着したのは偶然とは言いがたい。

さて、このように、小笠原諸島に引き寄せられた私は、何をどうすればよいのだろうか。一人の北海道出身茨城県人としては、北海道でも茨城県でも味わうことのできない自然を腹の底から満喫し、接触領域としての歴史をつまみ食いすればそれでよい。しかし、一人の研究者、英語文学研究者としては、どうだろうか。やはり研究してみたい。小笠原方言のような混成言語によって書かれた文学テクストを読み、そこから複数の言語の接触が生み出す可能性を論じたい。例えば、英語とサモア島の言葉、そしてその接触が生んだ混成言語をとりこんで書かれたR・L・スティーンソンの 'The Beach of Falesá' (1890) のようなテクストが、小笠原諸島において書かれているなら

ば、それを研究対象とすることになるだろう。

ステイーブンソンのこの小説は、ミクロネシアの北方にある小笠原諸島からはるか西のポリネシアにあるサモア島の某所で、白人男性の語り手「私」(Wiltshire)が結婚相手として現地人のウマという女性を選ぶことを核とした物語である。彼女はあることをおそれている。それは、白人の「私」が自分を愛していることに嫉妬した男がかけた呪いのことである。

‘I ‘shamed,’ she said. ‘I think you savvy. Ese he tell me you savvy, he tell me you no mind, tell me you love me too much. Taboo belong me,’ she said, touching herself on the bosom, as she had done upon our wedding-night. ‘Now I go ‘way, taboo he go ‘way too. Then you get too much copra. You like more better, I think. *Tofā, alii,*’ says she in the native – ‘Farewell, chief!’<sup>8</sup>

この小説の編者、ロズリン・ジョリーによれば、上記の引用でウマが使っている言語は、Beach de Mar と称される言語の存在を示唆しているという。

*Beach de Mar*: or Beach-la-Mar, a pidgin language of the Pacific region produced by contact between Europeans and islanders speaking mutually unintelligible languages. Often referred to as a ‘Trade jargon’, it emerged from the need of nineteenth-century traders to communicate with islanders from whom they wished to obtain the sea-cucumber or beche-de-mer, from which the language takes its name. It was spread by the labour trade as a means of communication, not only between Europeans and islanders, but between islanders speaking different languages. Strictly it should be identified with Melanesia rather than Polynesia (it formed the basis of Melanesian creole languages such as ‘Bislama’ in Vanuatu), but Stevenson seems to have regarded it as the lingua franca of the entire Pacific region, stating that ‘it may be called, and will almost certainly become, the tongue of the Pacific.’ (Tusitala, xx.10)<sup>9</sup>

このような「共通語」が着実に広がっていく可能性が、小説の最後で示唆され

ている。

My public house? Not a bit of it, nor ever likely. I'm stuck here, I fancy. I don't like to leave the kids, you see: and – there's no use talking – they're better here than what they would be in a white man's country, though Ben took the eldest up to Auckland, where he's being schooled with the best. But what bothers me is the girls. They're only half-castes, of course. I know that as well as you do, and there's nobody think less of half-castes than I do; but they're mine, and about all I've got, I can't reconcile my mind to their taking up with Kanakas, and I'd like to know where I'm to find the whites? <sup>10</sup>

「私」とウマの子供たち、特に娘たちは、「私」の困惑するところでは“their taking up with Kanakas”（娘たちは現地人とつきあう）ことになるという。「私」は困惑しているのだが、それはヨーロッパ人の「私」にとっての困惑に過ぎない。彼の娘たちは、サモア語やビーチ・ラ・メールを使いながら、サモア島が20世紀以降に経験した過酷な歴史を生き抜いていったことであろう。——この‘The Beach of Falesá’のようなテキストが、小笠原諸島において存在している場合、英語文学研究者はそのテキストを読み、接触領域における言語や文化の問題を、自分の関心に引きつけつつ研究することができるだろう。

### 3

残念ながら、小笠原諸島という英語と日本語の接触領域の中で生産された英語の文学テキストは少ない。ロングや石原によれば、小笠原諸島に立ち寄った欧米人の日記や、欧米系島民を日本に帰化させるときの日本側の記録は残っている。<sup>11</sup> そこには、欧米日の言語や法をめぐるせめぎ合い（の痕跡）が記録されている場合もある。しかし、そのようなせめぎ合いの中から生まれた文学テキストがあるかと言われれば、答えは否である。正確に言うならば、英語文学研究者によって、このせめぎ合いの中から生まれたテキストの中で「これは英語文学研究の対象になる」と認定されたテキストが極めて少ないのである。

小笠原諸島に触れた英語文学作品が存在しないわけではない。例えば、ジャック・ロンドン（Jack London）の自伝的小説として有名な *John Barleycorn*

(1913)がある。この作品には、ロンドン自身が、1893年、アザラシ漁船に乗り、ハワイ、小笠原諸島、日本、ベーリング海へと7ヶ月間の航海をした時のエピソードが取り込まれている。とはいえ、肝心の小笠原でのエピソードとは、要するに飲み助の武勇伝である。ソフィー・サザランド号に乗船、サンフランシスコを出航して45日間の航海中、酒を飲んでいなかった17歳の主人公ジョン・バリーコーンは、生まれて初めての外国である小笠原に到着して大興奮、なんでも見てやろうやってやろうと上陸するが、船員仲間のヴィクター（スウェーデン人）とアクセル（ノルウェー人）と絆を深めるため（という名目で）、一緒に怪しげで度数の強い酒らしきものを呑むと、酒癖が悪いヴィクターが暴れ出し、ようやく喧嘩を抑えたと思ったら、ジョンとアクセルが飲み屋でのんびり酒を飲んでいるところにまた暴れ出したヴィクターが乱入、飲み屋に大きなダメージを与えてしまい、ジョンとアクセルは弁償することになったのだが、この乱暴狼藉は警察では手に負えぬと判断した当局のトップが、停泊中の船の船長全員に船員の船への引き揚げを命じた云々、というものである。欧米系島民、そして日本人（警察、行政）からなるヘテロジニアスな空間が記述されているが、これらの人々の相互の対立や交流が詳細に書かれているわけではない。小笠原方言が記録されているわけでもない。残念ながら、英語文学研究者が、小笠原諸島における言語・文化の複数性を考察するのに格好の作品とは言いがたい。<sup>12</sup>

ではどうするか。いくつかの選択肢が考えられるが、本論では「英語文学研究者が研究対象とするテキストの存在が確認されていないのだから研究しない」という選択肢については考察しない。考察すべきは、どのように研究するのかということであるべきだからだ。以下、三つのケースを考えてみる。1：英語文学研究者をやめて、日本（の境界）文学研究者となり、例えば三鬼晴子のように、「内地」の作家による「今は忘れられてしまった「小笠原ネットワーク」」による小笠原表象を研究するという選択肢があるだろう。<sup>13</sup> これは研究者個人の無限に広がる知的好奇心を抑圧しないという意味で極めて魅力的だが、本論ではひとまず英語文学研究者としてどうするかについて考えてみたい。まず、2：リサーチを徹底的におこなって、研究対象を発見するという選択肢があるだろう。俗な言い方をすれば、小笠原版の‘The Beach of Falesá’を探し当てるということだ。研究者ならば当然おこなうべきであろう。当然であるから、この選択肢も本論ではこれ以上考察しない。おそらく考察が必要なのは、3：現時点では英文学研究者にとって研究対象とみなされていないテクス

トを、研究対象として捉え直すという選択肢と、4：現時点で英語文学研究者にとっての研究対象を発見できなくても、研究対象を別の場から持ち込み、小笠原という場に接触させてしまえばよいのではないかという選択肢である。3についての考察は、確実に〈文学〉とはなにかという大きな問いを誘発することになるので、別の機会に譲る。本論では、4について考察をすすめるための予備的な作業として、近年出版されている興味深い翻訳作品について触れておきたい。

## 4

まず、James Joyce, *Finnegans Wake* (1939) の翻訳、柳瀬尚紀訳『フィネガンズ・ウェイク』(1991年)を取り上げる。すでに私は本誌50号において、柳瀬は、ケルト語と英語がせめぎ合ってきたアイルランドの地名を、日本語とアイヌ語がせめぎ合ってきた北海道のアイヌ語地名へ、例えばアイルランドの首都ダブリンを北海道東部の(かつての中核都市である)根室(アイヌ語で樹林の意のニムオロに由来する)<sup>14</sup>へと変容させるという荒技を翻訳でやってしまっていることを論じた。

And as I was jogging along in a dream as dozing I was dawdling,  
 arrah, methought broadtone was heard and the creepers and the  
 gliders and flivvers of the earth breath and the dancetongues of the  
 woodfires and the hummers in their ground all vociferated echoing:  
 Shaun! Shaun! (404)

そしてわしがえ<sup>ゆめ</sup>ちらお<sup>ねむろ</sup>ちら夢のなかをとろとろぶらぶらしていると、  
 ありやま、根室<sup>ねむろ</sup>一<sup>ねむろ</sup>つてお<sup>ねむろ</sup>びろがりな声<sup>ねむろ</sup>がしたと思<sup>ねむろ</sup>つたら、<sup>ねむろ</sup>這<sup>ねむろ</sup>いずるのや  
 土<sup>つち</sup>の息<sup>いき</sup>した滑<sup>すべ</sup>るのや飛<sup>と</sup>ぶのや、焚<sup>たき</sup>火<sup>び</sup>の踊<sup>おど</sup>り舌<sup>した</sup>や浅<sup>あ</sup>瀬<sup>せ</sup>の海<sup>え</sup>老<sup>び</sup>づらでぶ<sup>ぶ</sup>んぶ<sup>ん</sup>  
 いうのや、そいつらがみんなしてがなりこだまの始<sup>はじ</sup>まりときた。ショーン！  
 ショーン！（柳瀬Ⅲ，10）

● “Broadstone railway terminus, D.”(McHugh)。1937年に廃止された〔ダブリンの〕リフィー川左岸の駅だった。

● JR 根室駅は根室本線の終点である。この駅はまだ現役だが、小さく古い駅である。到着すると、「根室～，根室～」という「おっぴろがりな」(broad tone) 運転手のアナウンスがきこえる(場合もある)。早稲田大

学入学のため上京した柳瀬もこの「おっぴろがり」な国鉄職員のアナウンスが響く根室駅をあとにしたのではないか。<sup>15</sup>

さて、この引用で明らかのように、北海道根室市出身の柳瀬は、*Finnegans Wake*の舞台、アイルランドの首都ダブリンのブロードストーン駅を北海道の国鉄根室駅を念頭において翻訳している。そして、少なくともダブリン（周辺）の地名を根室（地方）の地名で置き換えた例は他に2つある。アイルランドの地名と北海道のアイヌ語地名の置き換えに至っては、私が数えた限りでは、全部で49ある。<sup>16</sup> つまり、柳瀬の翻訳によって、アイルランド（や*Finnegans Wake*に刻み込まれた様々な地域）の多言語・文化の歴史が、北海道のそれと重ね書きにされてしまったのである。ちなみに、有名なRoland McHughの注釈を読んでも、*Finnegans Wake*には北海道のアイヌ語地名やアイヌ語そのものが書き込まれているという記述はない。<sup>17</sup> だから、例えば北海道の歴史や文化や文学を研究する者が*Finnegans Wake*を研究することは考えにくいし、*Finnegans Wake*研究者が北海道の歴史や文化や文学を研究することも考えにくい。しかし、柳瀬の翻訳は、この考えにくいことを可能にしている。著名な英語文学を数多く生み出すことがなかった北海道に、ジョイスが持ち込まれたのである。

もう一つ、2004年に出版された、武藤浩史によるD・H・ロレンス『チャタレー夫人の恋人』の翻訳を取り上げる。第一次世界大戦で下半身を怪我し、性的不能者になったクリフォード・チャタレーが、妻のコニーに、新しくやってきた猟番のメラーズを紹介する場面から引用する。

《コニー、新しく来た猟番のメラーズだ。奥さまと話したことはないね、メラーズ》

《ごさいません》と、即座に特徴のない答えが返ってきた。（中略）

コニーが彼に言った。

《でも、しばらく、ここにいるのでしょうか？》

《八ヶ月です、チャタレーさま……奥さま》

冷静に言い直した。

《居心地はいいですか》

女が男の目を見つめた。男の目が、皮肉に、もしかしたら生意気に、少し細まった。《ええ、はい、有り難うございます、奥さま！わたしはここで

育ったもんですけん・……》

再度、軽くお辞儀をして、帽子をかぶり、大股で車椅子のところまで歩いて、それをつかんだ。最後の数語で男の声が強い方言に変わったのだった……それまでは気配さえなかったのだから、馬鹿にしているのかもしれない。男はほとんど紳士と言っていいくらいだった。まあ、ふしぎな、動きの速い、ぼつんとした男だ。孤独で、だが自分に自信がある。<sup>18</sup>

この場面は、最初コニーに対して努力して標準語を使おうと努力していたメラーズの言葉がはじめて「強い方言に変わった」という箇所である。この場面も含めて、コニーとメラーズの関係が深まるにつれて、二人の会話の中にイングランド中部の方言が頻繁に使用されることになってゆく。

男は強いなまりで、

《おれは、若鶏んために小屋作っとるたい》

と、言った。

コニーは何と言えればいいか分からず、力が抜けた。

《ちょっと座りたいのだけれど》

男は女の前を通過して小屋まで行くと、木材などを脇にどけてハシバミの枝でできた田舎風椅子を出してきて言った。

《小屋んなか、はいっちきて、ここに座れ》

そして、方言のふしぎな素朴さでたずねた。

《火いおこしちゃるか》

《ああ、気にしないで》<sup>19</sup>

さて、ロレンスが使ったのはイングランド中部の方言だが、これを訳者の武藤は「九州方言らしきもの」に直しているのだという。

作中きわめて重要な役割を演じる英中部方言の訳出に際しては、『チャタレー』同様炭坑に縁が深い九州地方の方言らしきものを、五木寛之氏の『青春の門』などを参照して、作りだした。

今回も翻訳に際して多くの人びとに助けをいただいた。その方言訳では、同僚にして親友の横山千晶さんに大変お世話になった。<sup>20</sup>

このような方言の創作によって、メラーズがしゃべるイギリス中部労働者階級の言葉や炭坑地方の歴史が、九州の方言や筑豊炭田の歴史に接続されたことになる。おそらく、この方言の「創作」については、読者によって賛否両論であろう。しかし、次の事は確言できる。つまり、柳瀬の翻訳によって、ジョイスが北海道のものになったように、武藤の翻訳を媒介にして、ロレンスの作品は九州のものになったのだ。こうして、英語文学研究者が九州でロレンスを研究することが可能になったのである。

柳瀬と武藤の翻訳を念頭におくと、小笠原諸島には英語文学研究者にとって研究対象がないと言い切るのはもったいないと思ってしまう。例えば、小笠原方言を使って‘The Beach of Falesá’を翻訳してみたらどうだろうか。タイトルは『Falesá 浜』がいいかもしれない。<sup>21</sup>ともあれ、そのような小笠原訳が世に出た時点で、‘The Beach of Falesá’は小笠原諸島に接ぎ木されることになるだろう。そして、英語文学研究者は、小笠原諸島において、英語文学テキストを〈研究〉することができるようになるのだ。無論、この〈研究〉は、私たちがいま漠然と〈研究〉と考えているものとは異なるものであると思われるのではあるが。

## 注

本稿は、仏教慈済大学（台湾、花蓮市）において開催された「2008東方文化學術研討會」（2008年6月21日）における口頭発表原稿に手を加えたものである。

- 1 ダニエル・ロング、橋本直之編『小笠原ことばしゃべる辞典』南方新社、2005年、13-14頁。
- 2 ダニエル・ロング「小笠原の多言語社会」、真田信治・庄司博史編『事典 日本の多言語社会』岩波書店、2005年、250頁。
- 3 ダニエル・ロング編『小笠原学ことはじめ』南方新社、2002年。なおこの著書は「小笠原シリーズ1」である。「シリーズ2」としてダニエル・ロング、稲葉慎編『小笠原ハンドブック——歴史、文化、海の生物、陸の生物』（南方新社、2004年）、「シリーズ3」として、注1の『小笠原ことばしゃべる辞典』がある。なお、ロングの英語による著書として以下のものがある。Daniel Long, *English on the Bonin (Ogasawara) Islands*, Duke UP, 2007.
- 4 ロング編『小笠原学ことはじめ』、1頁。
- 5 石原俊『近代日本と小笠原諸島——移動民の島々と帝国』平凡社、2007年。
- 6 同上、433頁。なお、引用したフレーズの前後を引用しておく。「ここで本書は、第一章で取り上げた、「女王様」の子孫だと自称する「ケテさん」や、「俺らの先祖はみんな海賊だよ」と自称する池田実さんに立ち戻ることになる。／ふたたびマイケル・タウシグの言葉を借りて言えば、「ケテさん」や実さんの語りに

- は、小笠原諸島に集まってきたかれらの祖先やかれら自身が経験してきた「征服の歴史」が刻み込まれている。この「征服の歴史」には、この島々を取り込もうとする帝国がかれらを法の対象にすべく投げかけてきた、「帰化人」「異人」「マイノリティ」「在来島民」などの他称がともなっている。／他方で「ケテさん」や実さんの語りには、海と島々に生きる移動民（の子孫）としての法の〈波打ち際〉を生き抜いてきた人びとの、無数のたたかひの経験が折り込まれている。かれらは、帝国が投げかけてくる「異人」「帰化人」「マイノリティ」「在来島民」といった他称に対して、「先住民（族）」「小笠原人」といった自己表象を対置することはない。だが、かれらの経験の中から「女王様」や「海賊」という自称が語り出されるとき、重ねかかれてきた主権的な力を脱臼させる「アーネキカルで反抗的」な生の〈断片〉は渦巻き続けるであろう。」（石原，432-3頁）
- 7 齋藤一『帝国日本の英文学』人文書院，2006年。
  - 8 Roslyn Jolly, ed. Robert Louis Stevenson, *South Sea Tales*, OUP, 1996, 28.
  - 9 同上，264。
  - 10 同上，71。下線は齋藤によるもの。
  - 11 ロングによる以下のサイト，特に Ogasawara Documents を参照せよ。（<http://nihongo.human.metro-u.ac.jp/long/bonins/default.html> [2008年6月16日 閲覧]）。このサイトには、小笠原諸島における欧米日の接触初期から20世紀初頭にかけての英語で書かれた歴史書や公文書の電子テキストへのリンクが掲載されている。ただし、(英語) 文学作品は後述の *John Barleycorn* へのリンクしかない。
  - 12 Jack London, introduction by Pete Hamil, *John Barleycorn*. Modern Library (Random House), 2001, pp.89-96。ロンドンの作品以外で、小笠原諸島を舞台とした英語文学作品を私は知らない。ただし、これは太平洋の英語文学についての知識が足りない私の調査が決定的に不足しているためであろう。注1の引用が示しているように、少なからぬ人々の移動があったのは事実であるから、単なる記録とも言いがたい過剰さを内包したテキストが存在していてもおかしくないはずである。
  - 13 三鬼晴子「小笠原，旅と博覧会から見た風景」，ダニエル・ロング編著『小笠原学ことはじめ』，54頁。
  - 14 『広辞苑』電子版（岩波書店，第五版準拠，1998年；2005年）。なお、「根室」は以下のように説明されている。「①もと北海道11カ国の一。根室市を含み，根室支庁の管轄。②北海道東部，日本最東端の市。根室市長の所在地。北洋漁業の基地。人口3万4千。」
  - 15 齋藤一「柳瀬尚紀訳『フィネガンズ・ウェイク』I～IVにおけるアイヌ語地名」，筑波大学人文社会科学研究所文芸・言語専攻『文藝・言語研究』2005年，102頁。付記しておけば，この引用は，ジョイスのテキスト，柳瀬の翻訳，*Finnegans Wake* 注釈書（特に Roland McHugh, *Annotations to Finnegans Wake*, Revised Edition [Baltimore and London: Johns Hopkins UP, 1980: 1991]）の引用，齋藤の解説となっている。
  - 16 同上，97-119頁。
  - 17 McHugh の *Language Abbreviations* 欄には J (Japanese) の項目はあるが Ainu

はない。McHugh, xiv-xv.

- 18 武藤浩史訳『チャタレー夫人の恋人』筑摩書店、2004年、87-88頁。ちなみに、「《わたしはここで育ったもんですけん》」は、ロレンスのテキストでは単に “I was reared here -” (46) であって、格別の方言らしさは言葉の上では表現されていない。ここはやはり「男の声」、すなわちつまりイントネーションが変わったということなのであろう。なお、ロレンスのテキストは1993年出版のケンブリッジ大学版全集を元にした Michael Squires, ed. *Lady Chatterley's Lover* (Penguin, 1994)を参照した。
- 19 同上、168-169頁。なお「《おれは、若鶏んために小屋作っとるたい》」は、ロレンスのテキストでは以下のとおり。“Ah'm getting' th' coops for th'young bods.” (Squire, ed. [88])。
- 20 同上、615頁。
- 21 小笠原諸島には、日本系島民の歴史に由来するのであろう天之浦や万作浜があるが、欧米系島民の歴史に由来するのであろう「ジョンビーチ」や「ワシントンビーチ」（いずれも父島）もある。Falesá 浜があってもおかしくない。